



モチベーションクライシス到来の 原因と社会の現状及び今後の方針

自由ヶ丘高等学校3年

かわしま たける

河島 健さん

現在日本において「モチベーションクライシス」が大きな問題になっている。モチベーションクライシスとは主に若者の士気の低下のことを言い、ニートやフリーターの増加に象徴される。

内閣府発行の平成15年度版国民生活白書によれば、2001年の段階でフリーターの数は417万人であり、若年人口の実に12.2%に達している。1990年調査で報告された183万人から大幅に増加しており、これからも増加していくと見込まれている。フリーター増加は所得税を中心とした税収の低下を始めとする諸問題の原因となるため、いち早い対策が望まれている。だが対策を立てるためには、まずなぜニートやフリーターは増えるのかを明らかにする必要がある。ここでは歴史的・文化的・教育的な面から探っていく。

まず歴史的な面である。『働かざるもの食うべからず』とよく言われてきたものだが、その一方で日本には古来より働かないで日々を暮らすことを美德とする向きが存在した。俗世を離れ山に籠もった隠者がそのいい例である。彼らは社会的に何の労働もしていなければ、経済的に貢献することもまず無かった。自分が生きるために最低限の労働をし、あとは歌を作るなり好きなことをして暮らす。まさしくニートそのものではないか。だが日本の歴史はそのような彼らを容認どころか称賛すらしてきたのである。吉田兼好や西行といった代表的隠者に共通することは食うに困らない裕福な財産があることである。ニートも同様に働かなくても食える財産があるのであり、それが増えたということは豊かになった日本社会の裏返しといえる。

次に文化的な面である。日本文化の根底には『和

を以て尊しとなす』が存在すると私は考えている。和は美德であるが、時に和を乱すものを無条件に排斥しようとする向きもある。よって日本人の大半は和を乱すことを良しとせず、平和的に事なかれ主義へと走っていく。フリーターはさりげなく「個性を尊重」しながら和を乱さずに社会を生きていく格好の手段といえるだろう。昨今なにかと雇用不安や社会不安が叫ばれている中で、周囲に影響を与えず生きていく手段としてフリーターは非常に魅力的であったろう。

最後に教育的な面である。教育の現場で『個性の尊重』が叫ばれるようになって久しいが、この教育のあり方が問題である。前述のように和を何よりも重んずる日本文化の中では個性というものは存在しにくい。その中で欧米的な個人重視の考え方を定着させるには文化の一部を変化させるほどの膨大な労力が必要なのは言うまでもない。だが日本の教育機関はそれを怠り、教育者自身が個性とはなんなのかを十分理解しないまま伝えてしまった。個性尊重という名の甘やかしになってしまったのである。こうして個性の履き違えが生じる。周囲に迎合しないことを個性の尊重だと思ってしまう。履き違えた本人は、履き違えているなど夢にも思わないだろうから、なぜ非難されなければならないのか理解できないはずだ。理解できないなら、是正することはできない。

以上の三点を総合すると、もともと日本はフリーターを生み出しやすくモチベーションクライシスに陥りやすい風土と考え方があったと考えられる。しかし明治から昭和中期までの日本は国民一丸となる教育や国家への信頼で歴史的また文化的側面を抑制して

いた。だが現代になってから教育の不備や経済的停滞によって、タガが外れた結果が現在であると考えられる。

現在とられている対策としてカウンセラーの配置や一時的に正社員として雇うトライアル雇用などがある。確かにこれは一定の成果を挙げているようだが、これは対症療法に過ぎない。根本を治さない限りはモチベーションクライシスを解決することはできない。そして根本を治すには前述の3つの理由の他に、当事者たちをとりまく環境も考えなくてはいけない。

現在社会の風潮として、フリーターイコール悪であるという図式が半ば出来上がってしまっている。これは甚だ正しくない考え方である。フリーターは自らの進路を決める猶予期間や、創作系の職業や正社員になるまでの生計を立てる手段として本来認められるべき存在である。また、フリーターの増加には社会側の責任も多くあることを忘れている人も多い。

長引く不況などによって正社員雇用が減っていることは周知の事実であるが、正社員雇用が減った分の労力は安くて調達が容易なアルバイトに回される。正社員雇用が減ったのだから、フリーターが増加するのは当然の帰結である。正社員雇用を目指しながら失敗してしまった人たちが構成される『やむを得ず型』という分類があるが、これに属する人たちはまさに雇用減少のやむを得ずフリーターとなった人なのである。しかし彼らに対する社会の目は冷たい。中には能力その他を抜きにただ単にフリーターだった時期があるというだけで雇用しない企業もあると聞く。またフリーター全体の2～3割に達する人が発達障害による

就労困難者であることも忘れてはならない。彼らが社会に参画するための制度と設備作りも必要不可欠である。若者に責任を求めるのは簡単だが社会が己を見つめず、フリーター増加ひいてはモチベーションクライシス到来の責任を若者たちに押し付けているようでは根本的な問題の解決などできるはずがない。

我々はモチベーションクライシスをもたらした社会と、問題の本質をしっかりと見極めて社会の設計図を書き直す必要がある。教育は正しい個性の発育と尊重を教えなければならないし、日本人はハングリー精神を忘れず、他者を積極的に理解し、フリーターへの偏見をなくす必要がある。フリーターも一人の人間であることを決して忘れてはならない。

モチベーションクライシスの解決には、当事者だけでなく、企業や社会が一体となった根本的な社会制度の革新を行わなければならない。目先の利益だけで動くのではなく、一人ひとりが未来を見つめ、未来を作り出す志を持つこと。それこそがモチベーションであり、日本という国が、社会が、国民が、それを持ったとき初めてモチベーションクライシスを解決することができる。